

## 『業施設』和訳研究 (2)

— 第 1 章第 2 節～第 2 章 —

青 原 令 知

『業施設』和訳研究 (1) は『龍谷大学論集』第479号に掲載した (青原 [2012])。前稿では紙数の関係上、テキストについて詳しく論じられなかったので、ここであらためて若干の解説を加える。

『業施設』 (*Las gdags, Karma-prajñapti*) は周知のように、初期有部論書のいわゆる六足発智に含まれる『施設論』 (*Prajñaptiśāstra*) の一部であり、チベット語訳現存資料では『施設論』三部門のうち『世間施設』『因施設』に続く最後の部門に位置づけられる。『施設論』は、漢訳では六足論のうち他の五書を訳した玄奘の翻訳リストには存在せず、宋代の法護・惟浄訳 (『因施設』の部分訳) のみが残る。一方チベット大蔵経では逆に、『施設論』のみが現存し他の五書は翻訳されなかった。このように漢訳・チベット語訳それぞれに特殊な事情を抱えるほか、現存三部門の他に煩惱・智・定・名色などに関する部門も存在していたと推定され、また「アビダルマ大論」の異名を持つなど、有部論書の中でも特異な存在である。<sup>(1)</sup>

現存のチベット語訳『業施設』は、奥書によるとジナミトラ (Jinamitra) とダーナシーラ (Dānaśīla)、プラジュニャーヴァルマ (Prajñāvarma)、および訳官イエシェテ (Ye shes sde) らによって翻訳校訂されたとされるが、著者名は記されていない。<sup>(2)</sup> 分量は北京版で74葉、テルゲ版では58葉ほどで、『俱舍論』業品よりやや少ない程度である。『施設論』三部門の中では最も短い。

福田 [2000a] には本論全体の梗概が掲げられている。非常に有益なので

参照してほしい。それによって明らかなように、本論は全体が11の「章」(tshigs) に区分される。各章の末尾には必ず「業施設第二章」などの題名表記が添えられているが、章のタイトルは付けられていない。その点は前二部門に共通する。

これら11章それぞれの冒頭には目次偈 (sdom=uddāna) が掲げられる。目次偈を配置するのは、六足発智に共通して見られるスタイルである。しかしその目次の項目が本文のどこに該当するのかが明示されていない。また最終章の終わりには全11章の総目次 (spyi sdom) が別に提示される。ただしこの総目次は、各章の目次偈の最初の語もしくはその要約を再掲したもので、各章全体の要約を意味するものではない。

本稿の章節の分け方はこの章と目次偈にもとづいて行なった。必ずしも合理的な区分とはいえず、福田 [2000a] に掲げられた梗概では区分が若干改変されている。しかし本稿では原書の構成を明示する意味で、あえて目次偈通りの区分を採用した。したがって [福田2000a] と本稿では章節の設定が異なる部分がある。以下に内容にもとづいた章タイトルを掲げる。[ ] 内の数字は目次偈により細分された項目の数である。参考のためテキスト開始頁行を添える。

- 第1章 思業 [8] (ⓐi172b4 ⓑkhu208b3 ⓒkhu191a3)
- 第2章 三不善根 [4] (ⓐi185b7 ⓑkhu225a2 ⓒkhu205a1)
- 第3章 十不善業道の分別① [7] (ⓐi187b5 ⓑkhu226a6 ⓒkhu206a2)
- 第4章 十不善業道の分別② [4] (ⓐi197a4 ⓑkhu238b6 ⓒkhu216b2)
- 第5章 貪瞋癡俱生法の分別 [7] (ⓐi199a2 ⓑkhu241a5 ⓒkhu218b2)
- 第6章 十不律儀 [2] (ⓐi201b3 ⓑkhu244b2 ⓒkhu221a5)
- 第7章 各種不律儀の分類① [7] (ⓐi203b3 ⓑkhu247a3 ⓒkhu223a5)
- 第8章 各種不律儀の分類② [4] (ⓐi207a3 ⓑkhu251b4 ⓒkhu227a1)
- 第9章 業の因果関係 [3] (ⓐi209b6 ⓑkhu255a2 ⓒkhu229b6)
- 第10章 業と異熟 [6] (ⓐi215b4 ⓑkhu262a5 ⓒkhu236a5)
- 第11章 業の諸問題 [9] (ⓐi219b3 ⓑkhu268a5 ⓒkhu240b6)

今回公表するのは、第1章第2節（以下 [1-2] などと表記する）から第2章おわりまでの和訳である。

第1章は目次偈により8節に区分されるが、前稿分の [1-1] は身・語・意にわたる十業を説く『故思経』という經典の引用からなる。それに続く [1-2] では引用経を釈する形で思・思已の二業の分別がなされ、そのうちの思業について、三世分別 [1-3]、三性分別 [1-4]、三性の所縁分別 [1-5]、三界繫分別 [1-6] と各種分別を行なった後、業分別の偈 [1-7] が掲げられ、12種の業の包摂関係 [1-8] が語られる。第2章は4節からなり、全編で最も短い章である。三不善根の名称が列挙され [2-1]、その本質が定義され [2-2]、さらに十不善業道の名が列挙され [2-3]、十不善業道が三不善根から生ずることが説かれる [2-4]。青原 [2009a] で論じたように、これら二章の内容は第3章で本格的に十不善業道が説かれる伏線となっている。

前稿に引き続き、以下の和訳は福田琢より提供を受けた加藤ノートを活用し、適宜参照しながら進める。

#### 《参考文献》（前稿未出分）

- 青原令知 [2012] 『『業施設』和訳研究 (1)』『龍谷大学論集』479  
福田 琢 [2000a] 『『業施設』について』『日本仏教学会年報』<sup>(4)</sup>65  
[2005] 『『施設論』『品類足論』の原題について』『長崎法潤博士  
古稀記念論集 仏教とジャイナ教』平楽寺書店  
宮崎啓作 [1982] 『*Karma-prajñapti*（『業施設』）解説』印仏研究30-2  
山口益・春日井真也 [1980] 『施設論攷』春日井真也『インド仏教文化の  
研究』百華苑（1938初稿（未刊）1951改稿・加筆）

## 第1章 思業

### 1-1. 経文（故思経）

（以上前稿＝青原 [2012]）

1-2. 思業・思已業 (㊦175a2 ㊦211b7 ㊦193b4)

[上記経文中,]「故意の (saṃcetanīya) [業]」ということについて, それには思業 (cetanā karma) と思已業 (cetayitvā karma) の二つがある<sup>(5)</sup>。

「思業」は何か。答える。思・思向・意思されること・思に到ったこと・心の形成力・意業, これが思業といわれる<sup>(6)</sup>。

「思已業」は何か。答える。思已の身業と思已の語業, これが思已業といわれる。

1-3. 思業の三世分別 (㊦175a4 ㊦212a2 ㊦193b6)

その中で, 思業には過去のものがある。未来のものもある。現在のものもある。

1-3-1. 過去の思業 (㊦175a4 ㊦212a2 ㊦193b6)<sup>(7)</sup>

「過去の思業」は何か。答える。およそ思 [業] がすでに生じ, すでに生起し, すでに起こり, すでに成り立ち, すでに達成され, すでに完成され, 起こりおえて過ぎ去り, すでに尽き, すでに滅し, すでに失われ, すでに変異し, 過去と過去類と過去世に包摂されるもの, これが過去の思業である。

1-3-2. 未来の思業 (㊦175a6 ㊦212a5 ㊦194a1)<sup>(8)</sup>

「未来の思業」は何か。答える。およそ思業がまだ生じず, まだ生起せず, まだ起らず, まだ生成されず, まだ到達せず, まだ達成されず, まだ起こらず, 未来と未来類と未来世に包摂されるもの, これが未来の思業である。

1-3-3. 現在の思業 (㊦175a7 ㊦212a6 ㊦194a2)<sup>(9)</sup>

「現在の思業」は何か。答える。およそ思業がすでに生じ, すでに生起し, すでに起こり, すでに生成され, すでに到達し, 起こりおえて存続し, まだ変異せず, 現在…以下広説して, これが現在の思業である。

1-4. 思業の三性分別 (㊦175b1 ㊦212a8 ㊦194a3)

その中で、思業には善のものがある。不善のものもある。無記のものもある。

1-4-1. 善の思業 (㊦175b2 ㊦212b1 ㊦194a4)

「善の思業」は何か。答える。善の作意と相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。どのようなものかといえ、すなわち、  
[1] 無貪・無瞋・無癡によって如理に簡括して、眼で色を見、耳で声を聞き、鼻で香を嗅ぎ、舌で味を味わい、身で所触に触れ、意で法を知る「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善の思 [業] といわれる。

[2] さらにまた、取著することなく四静慮と四無色を修習する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善の思 [業] といわれる。

[3] さらにまた、断生命を離れることにもなう作意と相應する、また不与取・欲邪行・虚誑語・麤惡語・雜穢語・貪欲・瞋恚を離れることと正見にもなう作意と相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善の思 [業] といわれる。

[4] さらにまた、無忿・無恨・無覆・無惱・無嫉・無慳・無誑・無諂・慚・愧<sup>12</sup>にもなう「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善の思 [業] といわれる。

[5] さらにまた、挨拶 (pūrvābhiḥāpin)・礼拝・歡迎 (pratyuṭthāna)・合掌・敬礼にもなう作意と相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善の思 [業] といわれる。

[6] さらにまた、布施を施し、あるいは福德をなし、あるいは布薩 (poṣadha) に参加し、あるいは戒を受持して保ち、あるいは明浄な心によって自ら着手して行動する<sup>13</sup>「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善の思 [業] といわれる。

[7] さらにまた、善の作意によって苦を苦と作意し、あるいは集を集と、あるいは滅を滅と、あるいは道を道と作意する「思」から「心の形成力・意

業」まで広説したものを、これが善の思 [業] といわれる。

1-4-2. 不善の思業 (©176a5 ©213a7 ©195a1)

「不善の思 [業]」は何か。答える。不善の作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものを、これが不善の思 [業] といわれる。どのようなものかといえば、すなわち、

[1] 貪あるいは瞋あるいは癡によって、非如理に、また簡択せずに、眼で色を見、[乃至は] 意で法を知るまでの「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものを、これが不善の思 [業] といわれる。

[2] さらにまた、断生命にともなう作意と相応する、および不与取・欲邪行・虚誑語・僞惡語・雜穢語・食欲・瞋恚・邪見にともなう作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものを、これが不善の思 [業] といわれる。

[3] さらにまた、忿・恨・覆・惱・嫉・誑・詔・無慚・無愧<sup>00</sup>にともなう作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものを、これが不善の思 [業] といわれる。

[4] さらにまた、手や拳や掌で殴ることや、杖や鞭で攻撃することにともなう作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものを、これが不善の思 [業] といわれる。

[5] さらにまた、不善の結・縛・随眠・随煩惱<sup>09</sup>・纏と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものを、これが不善の思 [業] といわれる。

1-4-3. 無記の思業 (©176b5 ©213b8 ©195b2)

「無記の思 [業]」は何か。答える。無記の作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものを、これが無記の思 [業] といわれる。どのようなものかといえば、すなわち、

[1] 善心ではなく、染汚心でもなく、自然な状態で (prakṛtistha), 行儀作法 (īryāpatha) にしたがって、眼で色を見、乃至は意で法を知るまでの

「思」から広説したもの、これが無記の思 [業] といわれる。

- [2] さらにまた、取著する心によって四静慮と四無色を修習する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無記の思 [業] といわれる。
- [3] さらにまた、無記の結・縛・随眠・随煩惱・纏と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無記の思 [業] といわれる。

### 1-5. 三性の思の所縁分別 (㊦177a3 ㊦214a5 ㊦195b7)

善の思には、善を所縁とするものと、不善を所縁とするものと、無記を所縁とするものがあるのか。答える。[1] 善を所縁とするものもある。[2] 不善を所縁とするものもある。[3] 無記を所縁とするものもある。[4] 善・不善を所縁とするものもある。[5] 善・無記を所縁とするものもある。[[6] 不善・無記を所縁とするものもある。<sup>110</sup>] [7] 善・不善・無記を所縁とするものもある。善 [の思] に準じて、不善と無記 [の思] についての所縁も同様にあると説明されるべきである。

#### 1-5-1. 善思の所縁分別

##### 1-5-1-1. 善所縁の善思 (㊦177a5 ㊦214b1 ㊦196a2)

「善を所縁とする善の思<sup>111</sup>」は何か。答える。

- [1] 善の身業・語業と、善の心・心所の諸法と、善の心不相応行 [の諸法]<sup>110</sup>とを、「これらの法は原因をともなうて生じ、結果があり、異熟をともなう」と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。
- [2] あるいはまた、それらの法が功德をともなうことをくりかえし作意して、「これらの法は善であり、善士によって自ら証得され、諸仏と仏の声聞たちと最勝人たちと善士たちに称讃され、受持し正しく保持すれば自分を傷つけないだろう、他人も傷つけないだろう、両者とも傷つけないだろう、智慧を生じるだろう、困苦してしまう相手と交わることなく、涅槃に到るだろう」と<sup>111</sup>このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。これが善を所縁とする善の思である。

1-5-1-2. 不善所縁の善思 (㊦177b2 ㊦214b6 ㊦196a7)

「不善を所縁とする善の思」は何か。答える。

[1] 不善の身業・語業と、不善の心・心所の諸法と、不善の心不相応行 [の諸法] とを、「これらの諸法は原因をともなって生じ、結果があり、異熟をともなう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。

[2] あるいはまた、これらの法が過誤をともなうことをくりかえし作意して、「これらの諸法は不善であり、善士でない者によって自ら証得され、諸仏と私の声聞たちと最勝人たちと善士たちに非難され、受持し正しく保持すれば自分を傷つけるだろう、他人も傷つけるだろう、両者とも傷つけるだろう、智慧が失せるだろう、困苦してしまう相手と交わり、涅槃に到らないだろう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。これが不善を所縁とする善の思である。

1-5-1-3. 無記所縁の善思 (㊦177b7 ㊦215a4 ㊦196b4)

「無記を所縁とする善の思」は何か。無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行 [の諸法] とを、「これらの諸法は原因をともなって生じ、結果があり、異熟をともなう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無記を所縁とする善の思である。

1-5-1-4. 善不善所縁の善思 (㊦178a2 ㊦215a7 ㊦196b7)

「善・不善を所縁とする善の思」は何か。答える。善・不善の身業・語業と、善・不善の心・心所の諸法と、善・不善の心不相応行 [の諸法] とを、「これらの諸法は原因から生じ、結果があり、異熟をともなう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・不善を所縁とする善の思である。

1-5-1-5. 善無記所縁の善思 (㊦178a4 ㊦215b2 ㊦197a2)

「善・無記を所縁とする善の思」は何か。答える。善の身業・語業と、善の心・心所の諸法と、善の心不相応行 [の諸法] と、無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行 [の諸法] とを、「これらの諸法は原因から生じ、結果があり、異熟をとまなう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・無記を所縁とする善の思である。

#### 1-5-1-6. 不善無記所縁の善思 (㊦178a7 ㊧215b7 ㊨197a5)

「不善・無記を所縁とする善の思」は何か。答える。不善の身業・語業と、不善の心・心所の諸法と、不善の心不相応行の諸 [法] と、無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行の諸 [法] とを、「これらの諸法は原因から生じ、結果があり、異熟をとまなう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが不善・無記を所縁とする善の思である。

#### 1-5-1-7. 善不善無記所縁の善思 (㊦178b2 ㊧216a3 ㊨197b1)

「善・不善・無記を所縁とする善の思」は何か。答える。善・不善の身業・語業と、善・不善の心・心所の諸法と、善・不善の心不相応行 [の諸法] と、無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行 [の諸法] とを、「これらの諸法は原因から生じ、結果があり、異熟をとまなう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・不善・無記を所縁とする善の思である。

### 1-5-2. 不善思の所縁分別

#### 1-5-2-1. 不善所縁の不善思 (㊦178b5 ㊧216a8 ㊨197b4)

「不善<sup>㊦</sup>を所縁とする不善の思」は何か。答える。

[1] 不善の身業・語業と、不善の心・心所の諸法と、不善の心不相応行 [の諸法] とを、「これらの諸法は原因なくして生じ、結果がなく、異熟がない」

と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。

[2] あるいはまた、それらの法が功德をともなうことをくりかえし作意して「これらの法は善であり、善士によって自ら証得され、諸仏と仏の声聞たちに称讃され」以下「両者とも傷つけないだろう」まで広説し、「智慧が生じらるだろう、困苦してしまう相手と交わることなく、涅槃に到らるだろう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。これが不善<sup>20</sup>を所縁とする不善の思である。

### 1-5-2-2. 善所縁の不善思 (㊦179a2 ㊦216b6 ㊦198a1)

「善<sup>20</sup>を所縁とする不善の思」は何か。答える。

[1] 善の身業・語業と、善の心・心所の諸法と、善の心不相応行〔の諸法<sup>20</sup>〕とを、「これらの諸法は原因なくして生じ、結果がなく、異熟がない」と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。

[2] あるいはまた、これらの諸法が過誤をともなうことをくりかえし作意して、「これらの諸法は不善であり、善士でない者によって自ら証得され、諸仏と仏の声聞たちと最勝人たちと善士たちに非難され、受持し正しく保持すれば自分を傷つけるだろう、他人も傷つけるだろう、両者とも傷つけるだろう、智慧が失せるだろう、困苦してしまう相手と交わり、涅槃に到らないだろう」と、このように作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したものである。これが善<sup>20</sup>を所縁とする不善の思である。

### 1-5-2-3. 無記所縁の不善思 (㊦179a7 ㊦217a6 ㊦198a5)

「無記を所縁とする不善の思」は何か。答える。無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行〔の諸法〕とを、「これらの諸法は原因なくして生じ、結果がなく、異熟がない」と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもので、これが無記を所縁とする不善の思である。

1-5-2-4. 善不善所縁の不善思 (㊦179b2 ㊧217b1 ㊨198b1)

「善・不善を所縁とする不善の思」は何か。答える。善・不善の身業・語業と、善・不善の心・心所の諸法と、善・不善の心不相応行〔の諸法〕とを、「これらの諸法は原因なくして生じ、結果がなく、異熟がない」と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・不善を所縁とする不善の思である。

1-5-2-5. 善無記所縁の不善思 (㊦179b4 ㊧217b4 ㊨198b3)

「善・無記を所縁とする不善の思」は何か。答える。善の身業・語業と、善の心・心所の諸法と、善の心不相応行の〔諸法〕と、無記の色と、無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行の〔諸法〕とを、「これらの諸法は原因なくして生じ、結果がなく、異熟がない」と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・無記を所縁とする不善の思である。

1-5-2-6. 不善無記所縁の不善思 (㊦179b7 ㊧217b8 ㊨198b5)

不善・無記を所縁とする不善の思は何か。答える。不善の身業・語業と、不善の心・心所の諸法と、不善の心不相応行〔の諸法〕と、無記の色と、無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行〔の諸法〕とを、「これらの諸法は原因なくして生じ、結果がなく、異熟がない」と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが不善・無記を所縁とする不善の思である。

1-5-2-7. 善不善無記所縁の不善思 (㊦180a2 ㊧218a5 ㊨199a1)

善・不善・無記を所縁とする不善の思は何か。答える。善・不善の身業・語業と、善・不善の心・心所の諸法と、善・不善の心不相応行〔の諸法〕と、無記の色と、無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行〔の諸法〕とを、「これらの諸法は原因なくして生じ、結果がなく、異熟がない」と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・不善・無記

を所縁とする不善の思である。

### 1-5-3. 無記思の所縁分別

#### 1-5-3-1. 無記所縁の無記思 (㊦180a5 ㊧218b2 ㊨199a4)

「無記を所縁とする無記の思」は何か。答える。無記の色と、無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行 [の諸法] と、これらの所縁に対して、有覆無記と無覆無記のいずれであれ作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無記を所縁とする無記の思である。

#### 1-5-3-2. 善所縁の無記思 (㊦180a7 ㊧218b5 ㊨199a7)

「善を所縁とする無記の思」は何か。答える。善の身業・語業と、善の心・心所の諸法と、善の心不相応行 [の諸法] と、これらの所縁に対して、有覆無記と無覆無記のいずれであれ作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善を所縁とする無記の思である。

#### 1-5-3-3. 不善所縁の無記思 (㊦180b3 ㊧218b8 ㊨199b2)

「不善を所縁とする無記の思」は何か。答える。不善の身業・語業と、不善の心・心所の諸法と、不善の心不相応行 [の諸法] と、これらの所縁に対して、有覆無記と無覆無記のいずれであれ作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが不善を所縁とする無記の思である。

#### 1-5-3-4. 善不善所縁の無記思 (㊦180b5 ㊧219a3 ㊨199b4)

「善・不善を所縁とする無記の思」は何か。答える。善・不善の身業・語業と、善・不善の心・心所の諸法と、善・不善の心不相応行 [の諸法] と、これらの所縁に対して、有覆無記と無覆無記のいずれであれ作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・不善を所縁とする無記の思である。

1-5-3-5. 善無記所縁の無記思 (㊦181a1 ㊧219a6 ㊨199b6)

「善・無記を所縁とする無記の思」は何か。答える。善の身業・語業と、善の心・心所の諸法と、善の心不相応行 [の諸法] と、無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行の諸 [法] と、これらの所縁に対して、有覆無記と無覆無記のいずれであれ作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・無記を所縁とする無記の思である。

1-5-3-6. 不善無記所縁の無記思 (㊦181a4 ㊧219b2 ㊨200a2)

「不善・無記を所縁とする無記の思」は何か。答える。不善の身業・語業と、不善の心・心所の諸法と、不善の心不相応行 [の諸法] と、無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行 [の諸法] と、これらの所縁に対して、有覆無記と無覆無記のいずれであれ作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが不善と無記を所縁とする無記の思である。

1-5-3-7. 善不善無記所縁の無記思 (㊦181b1 ㊧219b7 ㊨200a5)

「善・不善・無記を所縁とする無記の思」は何か。答える。善・不善の身業・語業と、善・不善の心・心所の諸法と、善・不善の心不相応行 [の諸法] と、無記の色と無記の心・心所の諸法と、無記の心不相応行 [の諸法] と、これらの所縁に対して、有覆無記と無覆無記のいずれであれ作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが善・不善・無記を所縁とする無記の思である。

1-6. 三界繫の思業分別

1-6-1. 三界繫の思業 (㊦181b4 ㊧220a3 ㊨200b2)

その中で、思業には欲 [界] 繫がある。色 [界] 繫がある。無色 [界] 繫がある。

「欲 [界] 繫の思業」は何か。答える。欲 [界] 繫の作意に相應する

「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲 [界] 繫の思業である。

「色 [界] 繫の思業」は何か。答える。色 [界] 繫の作意に相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色 [界] 繫の思業である。

「無色 [界] 繫の思業」は何か。答える。無色 [界] 繫の作意に相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色 [界] 繫の思業である。

### 1-6-2. 欲界繫の思の三性分別 (㊦181b7 ㊦220a8 ㊦200b5)

その中で、欲 [界] 繫の思には、善もあり、不善もあり、無記もある。

#### 1-6-2-1. 欲界繫の善思 (㊦182a1 ㊦220b1 ㊦200b6)

「欲 [界] 繫の善の思」は何か。答える。欲 [界] 繫の善の作意に相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲 [界] 繫の善の思である。どのようなものかといえば、すなわち、

[1] 無貪あるいは無瞋あるいは無癡<sup>㊦</sup>によって如理に簡択して、眼で色を見、耳で声を聞き、鼻で香を嗅ぎ、舌で味を味わい、身で所触に触れ、意で法を知る「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲 [界] 繫の善の思である。

[2] さらにまた、断生命を離れることにともなう作意に相應する、また不与取・欲邪行・虚誑語・離間語・龜惡語・雜穢語・貪欲・瞋恚を離れることにともなう、また正見にとともなう作意に相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲 [界] 繫の善の思である。

[3] さらにまた、無忿・無恨・無覆・無惱・無嫉・無誑・無詔・慚・愧にとともなう作意に相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲 [界] 繫の善の思である。

[4] さらにまた、欲 [界] 繫の挨拶・礼拝・歡迎・合掌・敬礼にとともなう作

意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の善の思である。

[5] さらにまた、布施を施し、あるいは福德をなし<sup>60)</sup>、あるいは戒を受持して保ち、あるいは布薩に参加し、あるいは明浄な心によって自ら着手して行動する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の善の思である。

[6] あるいはまた、欲[界]繫の善の作意によって、苦を苦と作意し、あるいは集を集と、あるいは滅を滅と、あるいは道を道と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の善の思である。

#### 1-6-2-2. 欲界繫の不善思 (㊦182b4 ㊦221a6 ㊦201b2)

「欲[界]繫の不善の思」は何か。答える。不善の作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の不善の思である。どのようなものかといえは、すなわち、

[1] 貪あるいは瞋あるいは癡によって、非如理に、また簡拙せずに、眼で色を見る[乃至は]意で法を知るまでの「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の不善の思である。

[2] さらにまた、断生命にともなう作意と相応する、また不与取・欲邪行・虚誑語・麁惡語・雜穢語・貪欲・瞋恚・邪見にともなう作意と相応する「思」<sup>61)</sup>から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の不善の思である。

[3] さらにまた、忿・恨・覆・惱・嫉・誑・詔・無慚・無愧にともなう作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の不善の思である。

[4] さらにまた、手・拳・掌で叩くことと、枝・鞭で攻撃することにともなう作意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の不善の思である。

[5] さらにまた、不善の結・縛・随眠[・随煩惱]<sup>62)</sup>・纏と相応する「思」か

ら「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の不善の思である。

### 1-6-2-3. 欲界繫の無記思 (㊦183a4 ㊦221b8 ㊦202a3)

「欲[界]繫の無記の思」は何か。答える。欲[界]繫の無記の作意と相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の無記の思である。どのようなものかといえば、すなわち、

[1] 善心ではなく、染汚心でもなく、自然な状態で、行儀作法にしたがって、眼で色を見る乃至は意で法を知るまでの「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の無記の思である。

[2] さらにまた、欲[界]繫の無記の結・縛・随眠・随煩惱・纏と相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが欲[界]繫の無記の思である。

### 1-6-3. 色界繫の思の三性分別 (㊦183b1 ㊦222a6 ㊦202b1)

その中で、色[界]繫の思には、善があり、無記もある。

#### 1-6-3-1. 色界繫の善思 (㊦183b2 ㊦222a6 ㊦202b1)

色[界]繫の善の思は何か。答える。色[界]繫の善の作意に相應する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色[界]繫の善の思である。どのようなものかといえば、すなわち、

[1] 無貪あるいは無瞋あるいは無癡によって如理に簡択して、眼で色を見、耳で声を聞き、鼻で香を嗅ぎ、舌で味を味わい、身で所触に触れ、意で法を知る「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色[界]繫の善の思である。

[2] さらにまた、取著することなく四静慮が修習される「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色[界]繫の善の思である。

[3] さらにまた、色[界]繫の挨拶・礼拝・歓迎・合掌・敬礼にとまなう作

意と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色  
[界] 繫の善の思である。

[4] あるいはまた、色 [界] 繫の善の作意によって、苦を苦と作意し、ある  
いは集を集と作意し、あるいは滅を滅と作意し、あるいは道を道と作意する  
「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色 [界] 繫の善  
の思である。

#### 1-6-3-2. 色界繫の無記思 (㊦184a1 ㊦222b6 ㊦203a1)

「色 [界] 繫の無記の思」は何か。答える。色 [界] 繫の無記の作意に相  
応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色 [界]  
繫の無記の思である。どのようなものかといえは、すなわち、

[1] 善心ではなく、染汚心でもなく、自然な状態で、行儀作法にしたがって、  
眼で色を見、耳で声を聞き、鼻で香を嗅ぎ、舌で味を味わい、身で所触に触  
れ、意で法を知る「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これ  
が色 [界] 繫の無記の思である。

[2] さらにまた、取著する心によって四静慮を修習する「思」から「心の形  
成力・意業」まで広説したもの、これが色 [界] 繫の無記の思である。

[3] さらにまた、色 [界] 繫の結・縛・随眠・随煩惱・纏に相応する<sup>60</sup>「思」  
から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが色 [界] 繫の無記の思  
である。

#### 1-6-4. 無色界繫の思の三性分別 (㊦184a6 ㊦223a5 ㊦203a7)

その中で、無色 [界] 繫の思には、善があり、無記もある。

#### 1-6-4-1. 無色界繫の善思 (㊦184a7 ㊦223a6 ㊦203a7)

「無色 [界] 繫の善の思」は何か。答える。無色 [界] 繫の善の作意に相  
応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色  
[界] 繫の善の思である。どのようなものかといえは、すなわち、

[1] 無貪あるいは無瞋あるいは無癡によって如理に簡択して、意で法を知る「思」<sup>65</sup>から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色[界]繫の善の思である。

[2] さらにまた、取著する[ことのない]<sup>66</sup>心によって四無色が修習される「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色[界]繫の善の思である。

[3] さらにまた、無色[界]繫の[善の]<sup>67</sup>作意によって、苦を苦と作意し、あるいは集を集と、あるいは滅を滅と、あるいは道を道と作意する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色[界]繫の善の思である。

#### 1-6-4-2. 無色界繫の無記思 (㊦184b5 ㊧223b4 ㊨203b5)

「無色[界]繫の無記の思」は何か。答える。無色[界]繫の無記の作意<sup>68</sup>に相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色[界]繫の無記の思である。どのようなものかといえば、すなわち、

[1] 善心ではなく、染汚心でもなく、自然な状態で、意で法を知る「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色[界]繫の無記の思である。

[2] さらにまた、取著する心によって四無色を修習する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色[界]繫の無記の思である。

[3] さらにまた、無色[界]繫の結・縛・随眠・随煩惱・纏と相応する「思」から「心の形成力・意業」まで広説したもの、これが無色[界]繫の無記の思である。

#### 1-7. 業分別の偈頌 (㊦185a2 ㊧224a2 ㊨204a3)

梵天の言葉を具えた最勝の律の制御者  
金色の身体のごとき御者中の第一人者  
導師になられたお方は

恐れなく業の区別を教示なさる<sup>99</sup>

1-8. 十二の業分別 (㉔185a3 ㉔224a3 ㉔204a3)

- [1] 一つの要因によって諸業は包摂される。業といわれるからである。
- [2] 二つの要因によって諸業は包摂される。思業と思已業<sup>(10)</sup>である。
- [3] 三つの要因によって諸業は包摂される。身業と語業と意業である。
- [4] 四つの要因によって諸業は包摂される。欲[界]繫と色[界]繫と無色[界]繫と不繫である。
- [5] 五つの要因によって諸業は包摂される。有記・無記の見所断と、有記・無記の修所断と、非所断の業である。
- [6] 六つの要因によって諸業は包摂される。見苦所断と見集・滅・道と修との所断と非所断である。
- [7] 七つの要因によって諸業は包摂される。欲[界]繫の見所断・修所断と、色[界]繫の見所断・修所断と、無色[界]繫の見所断・修所断と、非所断である。
- [8] 八つの要因によって諸業は包摂される。欲[界]繫の善・不善・無記と、色[界]繫の善・無記と、無色[界]繫の善・無記と、不繫の業である。
- [9] 九つの要因によって諸業は包摂される。善・不善・無記の身業と、善・不善・無記の語業と、善・不善・無記の意業である。
- [10] 十の要因によって諸業は包摂される。有漏の善・不善・無記の身業と無漏業、有漏の善・不善・無記の語業と無漏業、有漏の善・不善・無記の意業と無漏業<sup>(11)</sup>である。
- [11] 十一の要因によって諸業は包摂される。欲[界]繫の善・不善・有覆無記・無覆無記と、色[界]繫の善・有覆無記・無覆無記と、無色[界]繫の善・有覆無記・無覆無記と、不繫の業である。
- [12] 十二の要因によって諸業は包摂される。善・不善・有覆無記・無覆無記の身業と、善・不善・有覆無記・無覆無記の語業と、善・不善・有覆無記・無覆無記の意業である。

『アビダルマ大論』のうち「業施設」第一章。

## 第2章 不善根 (㊦185b7 ㊦225a2 ㊦205a1)

目次偈。

[1] 三根と [2] 区別と [3] 十不善業道と

また [4] 十業の因は三不善である

### 2-1. 三不善根分別 (㊦186a1 ㊦225a3 ㊦205a2)<sup>(42)</sup>

「三不善根」は何か。「三」とは、食不善根と瞋不善根と癡不善根である。

### 2-2. 三不善根の本質

#### 2-2-1. 食不善根 (㊦186a2 ㊦225a4 ㊦205a2)<sup>(43)</sup>

「食不善根」という中で、「食」(lobha)とは何か。答える。食欲 (rāga) と等食欲と貪著と愛著と耽著と渴愛と欲求と愛欲と迷悶と執著と取著と内縛と利欲と貪り (abhidhyā) と苦集への食と食から生じるもの、これを「食」という。

「不善根」とは何か。答える。その法は不善であり、またそれは多くの不善の法の根本であるから、したがってそれは、病の根本であり、腫瘍の根本であり、棘痛の根本であり、悪の根本であり、不浄の根本であり、雑染の根本であり、不清浄の根本であり、不明浄の根本である。

だから「食不善根」という。

#### 2-2-2. 瞋不善根 (㊦186a5 ㊦225a8 ㊦205a5)<sup>(43)</sup>

「瞋不善根」という中で、「瞋 (dveṣa)」とは何か。答える。有情たちに対する害心と怒りと憎悪とすでに瞋恚し現に瞋恚し当に瞋恚すべきことと恚と忿恚と心に恚があることと有情たちに敵対してすでに恚し現に恚しまさに恚すべきこと、これを「瞋」という。

「不善根」とは何か。答える。その法は不善であり、以下「不明浄の根本

である」まで広説する。

だから「瞋不善根」という。

### 2-2-3. 癡不善根 (D186a7 P225b3 N205b1)<sup>46)</sup>

「癡不善根」という中で、「癡」(moha)とは何か。答える。前世を知らず、来世を知らず、現世を知らず、内を知らず、外を知らず、内外を知らず、業を知らず、異熟を知らず、善くなされた業を知らず、悪くなされた業を知らず、善くなされ悪くなされた業を知らず、原因を知らず、原因から生じる諸法を知らず、有罪と無罪と劣と妙と黒と白と区別のある縁起の諸法を知らず、六触処を正しく如実に知らず、見ず、闇であり、愚癡であり、無明の闇であり、雷光<sup>47)</sup>であり、汚濁であり、障害であり、妨げであり、迷闇であり、盲目であり、無智であり、貧困類に属し、涅槃に到らず<sup>48)</sup>、無明であり、無明暴流であり、無明毒の根であり、無明毒の幹であり、無明毒の葉であり、無明毒の花であり、無明毒の果実であり、癡(mūḍha)であり、等癡であり、極癡であり、癡であり、癡から生じるもの、これが「癡」といわれる<sup>49)</sup>。

「不善根」とは何か。答える。その法は不善であり、またそれは多くの不善の法の根本であるから、したがってそれは、病の根本であり、以下「不明浄の根本である」まで広説する。

だから「癡不善根」という。

### 2-3. 十不善業道 (D186b6 P226a4 N205b7)

十不善業道は、断生命・不与取・欲邪行<sup>50)</sup>・虚誑語・離間語・僞惡語・雜穢語・食欲・瞋恚・邪見である。

### 2-4. 不善業道の因としての三不善根 (D187b4 P226a5 N206a1)

かの三不善根が、この不善業道の原因であり、根本であり、起因であり、基盤であり、動因であり、生者であり、条件であり、等起である<sup>51)</sup>。

「業施設」第二章。

註

- (1) これらの事情に関しては、山口・春日井 [1980]、福田 [2005: 169-174] に詳しい。福田によると、「施設論」は最初、「衆集經」に基づいて「集異門足論」が成立したと同様の仕方です。「起世經」から「世間施設」が単独で成立し、後に「因施設」や「業施設」あるいは他の部門も増広されたとき「阿毘達磨施設論」の総称が与えられ、分野別の一大アビダルマ論書となった最終形態にふさわしく「大阿毘達磨論」の別名で呼ばれるようになったと推測する。しかし筆者はむしろ、本書が「アビダルマ大論」の異名を持ったことは、仏典に「論」が自覚的に組み込まれた最初の痕跡とみたい。仏滅以来、仏教の伝承聖典は長らく經と律のみであり、アビダルマという研究姿勢はあっても「論」という聖典は存在しなかった。初期論書である「集異門足論」や「法蘊足論」「世間施設」も、成立当初はあくまで經への注釈・解説として着手されたものであり、論を編むという意識は希薄というより皆無だったに違いない。しかしその増広があまりに過度になり、「經」の範疇に収めきれなくなったとき「論」という聖典の一部門が別立された。「アビダルマ大論」の名称は、それを初めて宣言した言葉であり、その名を冠する「因施設」と「業施設」は当初から「論」を目論んで著された最初の文献といえるのではなからうか。
- (2) 周知のように「施設論」の作者としては、玄奘の伝承では大迦多衍那 (Mahākātyāyana) とされる (普光「俱舍論記」①1821.vol.41: 8b29) 一方、ヤショームトラは聖目健連 (Ārya-Mahāmaudgalyāyana) の作と伝え (SA: 11.28)、チベットの伝承もそれを支持する。しかし蔵・漢両訳いずれにも「施設論」そのものには作者名は明示されていない。
- (3) 先行する「世間施設」「因施設」の場合は、まず「篇」(bam po) もしくは「蘊」(phung po) という大区分が与えられ、その細分として「章」(thigs) が立てられるが、「業施設」では篇や蘊はなく章のみで区分される点が異なる。しかし、テンカルマ目録やブトン仏教史では「業施設」を前二部門と同じく篇で区分し、全5篇であると伝えられるという。山口・春日井 [1980: 122-123] 参照。
- (4) 前稿の参考文献中、福田琢 [2000] (加藤清造稿蔵文和譯「世間施設」(2)) を「福田 [2000b]」に訂正する。
- (5) cf. 「中阿含經」(111) 達梵行經 (①26.vol.1: 600a23-24) 云何知業。謂有二業。思已・思業、是謂知業。AN (6.63) [vol. III: 415.7-8] Cetanāhaṃ bhikkhave kammaṃ vadāmi; cetayitvā kammaṃ karoti kāyena vācāya manasā. [加藤ノート] はこれらに加えて「婆沙論」(①1545.vol. 27: 586

- c28) 「謂契經說業有二種。一思業，二思所起業。」及び『俱舍論』(㊦1558. vol. 29 : 67b18-19) 「契經說。有二種業。一者思業，二思已業。」を参照している。cf. AKBh: 192.9. sūtra uktam “dve karmaṇi cetanā karma cetayitvā ce” ti. 思業・思已業に言及する現存経典は、上記二経の他には見い出せない。両経は対応経典とされるが、この箇所ではANは二業と分類している訳ではなく、しかも意業を含む三業をすべて「思已」と見なす点が、本論の思已業=身語二業とする解釈とは大きく異なる。また本論 [1-1] に引かれる『故思経』は、明らかに身・語・意の三業が基本であるにも関わらず、本論はむしろ二業、特に「思業」を契機として解説を始めるのが特色である。その教学的意図については、青原 [2009a:934] 参照。
- (6) この思業の同義語羅列的な定義は、初期の有部論書に共通してみられるものである。荒井 [1981 : 69] 註(24)に用例が網羅的に紹介される。代表例のみ挙げておく。『品類足論』(㊦1542.vol. 26 : 699c10-11) 「思云何。謂思・等思・増上等思・已思・思類・心作・意業，是名爲思。」『業施設』が有部アビダルマの伝統に忠実な側面をもつことがわかる。この連句は『法蘊足論』の梵文断片からその原語が回収される。tathā samāpannasya yā cetanā samcetanābhisamcetanā cetayitam cetanāgataṃ cittābhisamskāro manaskarma ayam ucyate kuśalaḥ karmabhavaḥ / (Dietz [1984 : 65.17-19])
- (7) 以下の思業の三世分別は、『集異門足論』三法品(㊦1536.vol. 26 : 378c12-21)の三世の定義を流用したものとみられる。荒井 [1981 : 68] 註(20)参照。[加藤ノート]にも指摘がある。『集異門足論』(㊦1536.vol. 26 : 378c13-15) 過去世云何。答。諸行已起・已等起・已生・已等生・已轉・已現轉・已聚集・已出現・落謝過去・盡滅・離變，過去性・過去類・過去世攝，是謂過去世。
- (8) cf. 『集異門足論』(㊦1536.vol. 26 : 378c15-18) 未來世云何。答。諸行未已起・未已等起・未已生・未已等生・未已轉・未已現轉・未聚集・未出現，未來性・未來類・未來世攝，是謂未來世。
- (9) cf. 『集異門足論』(㊦1536.vol. 26 : 378c18-22) 現在世云何。答。諸行已起・已等起・已生已等生・已轉・已現轉・聚集・出現住・未已謝・未已盡滅・未已離變・和合現前，現在性・現在類・現在世攝，是謂現在世。
- (10) 漢訳でいえば「乃至広説」などの中略の表現。ここで略された内容は [1-2] で思業の定義として示された「思・思向・意思されたこと・思に到ったこと・心の形成力・意業」の定型連句を指す。以下にも類出する。このように文章に含まれる語を定義された連句に一々置き換えるような厳格な表現形式も、初期のアビダルマ論書に共通する特徴の一つである。
- (11) yong su zin pa ma yin pas. 無記思の例 [1-4-3] は yong su zin pa'i sems kyis とありこの場合と対になるが、意味を判断しかねる。[加藤ノート] は

「成就せざるを以て」(=yong su grub pa ma yin pas) と読む。

- (12) これらの十は後出の不善の思業の [3] の例と対概念になっている。慚・愧以外の無忿・無恨などは有部教学において法の要素として立てられることはないので、単に「忿なく・恨なく」等という意味とも解せられる。ただ、忿・恨・瞋・惱・嫉・慳・誑・諂が小煩惱地法、無慚・無愧が大不善地法、慚・愧が大善地法として分類されるのに対応して、無忿・無恨等の八に「小善地法」的な分類を想定していた可能性もある。「婆沙論」(①1545.vol.27:220b6-8)には、典型的な六つの心所法の区分(大地法・大善地法・大煩惱地法・大不善地法・小煩惱地法・不定地法)とは別に「大有覆無記地法」「大無覆無記地法」という範疇も示されており、後に「俱舍論」などの時代に淘汰されるまでには、有部教学において種々の心所分類法が試行されていたことが伺える。ただし「業施設」の時代には心所分類の意図は明確ではなく、荒井 [1981:68] がいうように過渡期的なものであろう。
- (13) dad pa'i sems kyis rang gis lag dar te las byed pa. [加藤ノート]「信心を以て自ら手を以て施作する」, 荒井 [1981:73]「淨心を以て自ら作業する」。
- (14) 荒井 [1981:68] 註(29)は、これら十法は七十八煩惱を列挙して分類する意図のない「法蘊足論」雑事品と、十小煩惱地法などに分類する「界身足論」「品類足論」との間の過渡期的形態を示すと理解する。
- (15) 煩惱を総称する定型句であり、初期論書から「俱舍論」いたるまで用いられる伝統的表現になっている。青原 [2009b:384] 参照。
- (16) この一文はテキストに欠落しているが、下の解説 ([1-5-1-6] など) によればここになければならない。本論には、特に機械的な法分別において同様の遺漏や混乱がしばしば見受けられる。翻訳現場での混乱とも考えられる。
- (17) dge pa'i sems pa la dmigs pa (善の思を所縁とするもの) とあるが訂正。
- (18) ここに挙げられる所縁の善法および後の不善・無記法の要素は、「法蘊足論」[①1537.vol.26:504c22-27]「云何善界。謂善身語業・心心所法・不相應行、及擇滅、是名善界。云何不善界。謂不善身語業・心心所法・不相應行、是名不善界。云何無記界。謂無記色・心心所法・不相應行、及虛空・非擇滅、是名無記界。」に共通している。本論では択滅・虚空・非択滅を除外するが、諸法が因果を有することを作意する思であるので、有為法に限定されたものと思われる。
- (19) cf. 「集異門足論」[①1536.vol.26:377b17-21]「是勝善法、是尊勝者信解受持。一切如來及諸弟子・賢貴普士共所稱讚。不爲自害・不爲他害・不爲俱害。不減智慧、不礙彼品、不障涅槃。受持此法能生通慧、能引菩提能證涅槃。」直後の不善の場合の対句とともに初期論書に見られる定型表現である。荒井 [1983:121] 註(1)参照。

- (20) skyes bu dam pas (善士によって) を skyes bu dam pa ma yin pas に訂正。
- (21) cf. 『集異門足論』 [①1536.vol. 26 : 377b10-13] 是不善法, 諸下賤者信解受持。一切如來及諸弟子・賢貴善士共所呵厭。能爲自害・能爲他害・能爲俱害。能滅智慧, 能礙彼品, 能障涅槃。受持此法不生通慧, 不引菩提不證涅槃。
- (22) テキスト rgyu med pa las byung ba 'bras bu med pa rnam par smin pa med pa yin no. (これらの諸法は原因なくして生じ結果はなく異熟はない) とあり, 不善思との混同がみられる。荒井 [1983 : 111] は否定辞をすべて取り去って上記の善所縁・不善所縁と同じになるよう訂正している。ただ無記法は無異熟であるので (『品類足論』 ①26 : 696c20-25参照), 厳密には最後の「異熟はない」は生かさねばならない。しかし無記所縁の不善思 [1-5-2-3] も同様の記述であるので, 本論がそこまで考慮しているかどうか判断しかねる。今は荒井の訂正にしたがう。
- (23) dge ba (善) を mi dge ba に訂正。[1-5-2-1] と [1-5-2-2] は所縁の善と不善が錯綜し, そのままでは内容に矛盾が出るので入れ替えた上で改める。本論では, 善思の所縁は善・不善・無記の順序, 無記思の所縁は無記・善・不善の順序で説かれており, それにしたがえば不善思の所縁は不善・善・無記の順序となる。
- (24) dge ba (善) を mi dge ba に訂正。
- (25) mi dge ba (不善) を dge ba に訂正。
- (26) テキストは mi dge ba'i lus kyi las dang ngag gi las dang mi dge ba'i sems dang sems las byung ba'i chos rnam dang mi dge ba'i sems dang mi ldan pa'i 'du byed rnam (不善の身業と語業と, 不善の心と心所の諸法と, 不善の心不相応行 [の諸法]) であるが, mi dge ba (不善) をすべて dge ba (善) に訂正。
- (27) mi dge ba (不善) を dge ba に訂正。
- (28) gzugs med pa (無色) を gzugs に訂正。
- (29) テキストは「あるいは無瞋あるいは無癡」を欠くが補った。
- (30) ①gnod sems dang mi byed pa, ②gnod sems dang byed pa. いずれも bsod nams byed pa の誤写とみる。[加藤ノート] の訂正によった。
- (31) 荒井 [1983 : 115.14] は「[欲界繫の] 不善の」と補って読んでいるが, 不善の思は欲界繫のみであるから, 補う必要はない。
- (32) yid la byed pa (作意) を sems pa に訂正。[加藤ノート] による。
- (33) テキストは「随煩惱」を欠く。慣用句なので, 単なる書写ミスであろう。
- (34) dang ldan pa'i を dang mtshungs par ldan pa'i と訂正。[加藤ノート] による。
- (35) テキストは「思」が脱落。

- (36) *yong su zin pa'i sems* (取著する心) を *yong su ma zin pa'i sems* と訂正。
- (37) テキストに欠くが補った。
- (38) *gzugs med pa'i yid la byed pa lung du ma bstan pa*. そのままでも意味は通じないことはないが、同様の他の訳文とは異なる。[加藤ノート] にしたがい、また統一性を保つため *gzugs med pa dang ldan pa'i lung du ma bstan pa'i yid la byed pa* と訂正する。
- (39) [福田2000a: 58] は次節 [1-8] の導入とみなす。妥当な解釈であろう。しかし出典不明でこれが教証とは断定できない。
- (40) *ced du bsams pa'i las*. [1-2] で思已業は *bsam pa'i las* と訳されているので原語が異なる可能性がある。「婆沙論」(㊦1545.vol. 27: 586c28) の「思所起業」の原語に相当するのかもしれない。
- (41) この項目が十とされる数え方について、宮崎 [1982] は十二因となると疑問を呈し、荒井 [1984: 122] 註(7)は有漏について九、無漏について一と数える見方もできるとする。類似の文献資料もなく、いまは荒井のように考えるほかはない。
- (42) 『集異門足論』三法品 (㊦1536.vol. 26: 376b12-13) 三不善根者。謂貪不善根。瞋不善根。癡不善根。以下の三不善根の解説は、全体が『集異門足論』からの借用である。[加藤ノート] はそれに加えて *Dhammasaṅgani*: No. 389 (=pp. 78-79) および *Vibhāga*:361 を参考として挙げている。
- (43) 『集異門足論』三法品 (㊦1536.vol. 26: 376b13-19) 貪不善根者。「貪」云何。答謂。於欲境、諸貪・等貪・執藏・防護・堅著・愛樂・迷悶・耽嗜・遍耽嗜・内縛・欲求・耽湎・苦集・貪類・貪生、總名爲「貪」。「不善根」云何。答謂。此貪法、是不善性、能爲無量不善法根。是故此法能爲病根・癭根・箭根・惱根・苦根・穢根・濁根・諸雜染根・不清淨根・不鮮白根。是故名爲「貪不善根」。cf. 『法蘊足論』雜事品 (㊦1537.vol. 26: 494c20-22)。
- (44) *chags pa mi dge ba'i rtsa ba gang zhe*. (貪不善根とは何か) とあるが、他の不善根と説相を統一させて訂正した。
- (45) 『集異門足論』三法品 (㊦1536.vol. 26: 376b19-27) 瞋不善根者。「瞋」云何。答謂。於有情、欲爲損害・内懷栽杌・欲爲擾惱・已瞋・常瞋・現瞋・樂爲過患・極爲過患・意極忿恚、於諸有情、各相違戾・欲爲過患・已爲過患・當爲過患・現爲過患、總名爲「瞋」。「不善根」云何。答謂。此瞋法是不善性、能爲無量不善法根。是故此法能爲病根・癭根・箭根・惱根・苦根・穢根・濁根・諸雜染根・不清淨根・不鮮白根。是故名爲「瞋不善根」。cf. 『法蘊足論』雜事品 (㊦1537.vol. 26: 494c22-26)。
- (46) 『集異門足論』三法品 (㊦1536.vol. 26: 376b27-c18) 癡不善根者。「癡」云何。答謂。於前際無知・後際無知・前後際無知、於内無知・外無知・内外無知、

於業無知・異熟無知・業異熟無知，於善作業無知・惡作業無知・善惡作業無知，於因無知・因所生法無知，於佛無知・法無知・僧無知，於苦無知・集無知・滅無知・道無知，於善法無知・不善法無知，於有罪法無知・無罪法無知，於應修法無知・不應修法無知，於下劣法無知・勝妙法無知，於黑法無知・白法無知，於有敵對法無知，於緣生法無知，於六觸處如實無知，如是無知・無見・非現觀・黑闇・愚癡・無明・盲冥・單網・纏裹・頑騃・渾濁・障蓋・發盲・發無明・發無智・滅勝慧・障礙善品・令不涅槃・無明漏・無明暴流・無明軌・無明毒根・無明毒莖・無明毒枝・無明毒葉・無明毒花・無明毒果・癡・等癡・極癡・改・等改・極改・癡類・癡生・改類・改生，總名爲「癡」。「不善根」云何。答謂。此癡法是不善性，能爲無量不善法根。是故此法能爲病根・癰根・箭根・惱根・苦根・穢根・濁根・諸雜染根・不清淨根・不鮮白根。是故名爲「癡不善根」。cf. 『法蘊足論』雜事品 (㊦1537.vol. 26 : 494c26-495a13)。

- (47) glog. 意味を判じかねる。cf. 荒非 [1983 : 120.10] = 「頑愚」, [加藤ノート] = 「内光」。
- (48) mya ngan las 'da' bar 'gyur ba (涅槃に到る) とあるが、意味の上から訂正した。
- (49) ごくわずかだが、最後の部分の原文が『法蘊足論』のサンスクリット断片から回収される。Dietz [1984 : 25.8] sāmohā pramoho mohā (!) mohajam iyam ucyate avidyā / 残念ながらその前の部分を欠いている。ただし、この場合の主題は癡 (moha) ではなく無明 (avidyā) である。初期論書において定式化した一連の類義語列挙による用語の定義であるが、この場合は癡と無明に共通して見られる定型句である。
- (50) ㊦はここに第三章の一部 (186b7-187b4) が混入している。書写上の混乱と思われる。
- (51) cf. 『婆沙論』 (㊦1545.vol. 27 : 243a10-11) 施設論亦説「三不善根，是十惡業道生長因本。」，『婆沙論旧訳』 (㊦1546.vol. 28 : 188b3-4) 施設經亦説「三不善根，十惡業因根。廣説如上。」

キーワード 業施設 *Karmaprajñapti* 思業 三不善根 十不善業道  
初期有部論書